

---

# 銀砂雪《あかいゆき》

赤色るべら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あかいゆき  
銀砂雪

### 【Nコード】

N2272Z

### 【作者名】

赤色るべら

### 【あらすじ】

雪が、しんしんと降り注ぐ中、傭兵ジオラートは、吸血鬼が棲む廃墟に向かって続く路を歩いていた。

「退治してくれ」と言う依頼のもと、刃を握り締めて会いに行く吸血鬼は、かつて傭兵団に所属していた頃、思い出に残る場所を滅ぼした存在だった。

その街で出会った一人の少女の事を思い返しながら、ジオラートは考える……「今夜は『赤い雪』が降りそうだ」と。

今宵の雪は深い。

そんな中、滅ぼされた街の残骸へと向かって、赤銅の髪の男が歩いていた。

「その街を滅ぼしたモノを退治してくれ」と言う依頼のもとに。今はそこを住処にしている、その魔を斬りに行くのだ。

雪は止む気配を見せず、音も無く積もって行くばかり。

白く霞む世界の中、彼は、一つの声思い出した。

《そんな顔してどうしたのよ、赤い雪が降るんじゃない？》

そう言った少女の、屈託の無い笑顔が脳裏に蘇る。

立ち止まって空を見やれば、雪は闇になお青白く、空は重鈍く、遠くなった街や木々の陰は深い黒で塗りつぶされたままだ。

何処にも、赤い色などは見当たらない。

それでも、

(今夜は降りそうだな、『赤い雪』が)

それでも彼は、そう思った。

腰に吊るした短剣は、背負った両手剣よりはるかに小ぶりなのに、いやに重い。

冷え切った短剣の柄尻が、身につけた革鎧の金具と擦れ合って、軋むような音を立てている。

だが今は、その音すら吸い取る程の静寂の方が耳に痛い。

……緑色の目を細める。

もうすぐ、あの残骸と化した地が見える筈だ。

あの地に在るはずだ。

いつ会っても、油彩と柑橘の香をさせていた少女の名残が。

少女が描いた油彩に残されていた風景が。

彼女と出会って別れたあの地を、壊滅させた吸血鬼が。

「十年なんぞ、あつと言つ間だよな、まったく」

目に見えるため息と共に、吐き出されたばやきの言葉。

廃墟となった街の、かつての姿を思い返して、彼は冷たくなった  
剣柄を握り締めた。

雪は、さらさらと折り重なって行く。

時計の砂が、落ちて行くように。

「何だよ、そのアカイユキって？」

依頼主の屋敷の一室で、さすがしい風に乗って少年の声が響く。室内は影が落ちて暗いものの、青々とした枝ごしに光を零す窓から見える空の色はとても明るい場所だ。

しかし、ずっと同じ姿勢で居る事を強いられていた彼の、身を乗り出しながらの問いかけは、至極不機嫌そうだった。

「私、あなたに動かないでって言わなかったかしら」

それをにこやかな笑顔で咎めたのは、木造の四つ足に立てかけられたカンバスと向かい合っている娘だった。

「ちよつとぐらい良いじゃねえか。いつまでこうしてろってんだよ

……」

そもそも何で俺が、こんな事をしなくちゃいけないんだ。文句を言いながらも、しぶしぶ姿勢を指示通りに戻す少年は、まだ若い傭兵、ジオラート。

戦の臭いを嗅ぎ付けては、赴いた土地で仕事を探す、そんな傭兵団に所属する一人だ。

とはいえ今の所、それらしいキナ臭さの気配は近郊に見当たらず、近辺の盗賊や魔物退治を引き受けて、場を繋いでいるのが現状だが。「本当に、ジオはせっかちな。もう少し大人しくしてられないの？」

そう言った目の前の少女に、一刻ほど前に「あなたの絵を描きたいから、題材になって？」と懇願されて今に至るのも、その延長の様なものである。

日銭貰って敵を斬って……そんな血なまぐさい雇われ達らしからぬ仕事の原因となった少女を、じとりとした半眼で眺めやる。

癖の無い長い銀髪に、日焼けを知らぬ様な薄紅の肌。この地方では余り見かけない、素朴さの滲む柔らかかな輪郭の顔立ちに、華奢な

印象の体軀をして。それらを包み隠すように、いつも頭から大きな漆黒の薄布をかぶっている。

彼女はアーシェ。今年十七になるジオライトよりも、確か二、三は上だったと聞いているが

「年増の癖に俺よか大人げない奴に、大人しくって言われたくは無えな」

次の瞬間、木炭がジオライトの額に一直線。

「誰がうまい事言えって言ったかしら」

「何すんだ年増」

反射的に手の平で額を庇って木炭を弾いたジオライトが、平然と少女に言い返すと、追撃が飛んで来た。今度は命中した。

「連呼するんじゃないやありません……まったく、何の話をしていたのか忘れるじゃない」

一時的にホクロが増えた額を手の甲で擦りながら、何すんだ、と抗議の視線を注ぐ少年に向けて、ため息混じりに続ける。

「で、何の話を……待て、お前も手を止める、話がそれる」

更なる追撃の構えをアーシェが見せたので、ジオライトは両手を拳げて降伏宣言をした。

転がった二つの木炭を拾い上げると投げて寄越し、それを彼女が受け取ったのを見届けてから、また姿勢を戻した。

「で、アカイユキが何だった?」

「そうそう、銀砂雪」

青い左目だけを開いて、細い木炭をかざしながら頬を緩めた。

「私の故郷での言い伝え……って言うより、御伽噺おとぎばなしから来る諺ことわざみたいなものね。辰砂しんしゃの雪、って意味なんだけど」

「辰砂?」

「ああ、赤い鉱石……石の事。陶磁器の塗料にしたり、地方によっては薬としても使っらしいわ。冴えた赤が出るのよ。辰砂の結晶は、私は見た事ないんだけど」

透き通った綺麗な深紅なんですって。

そう嬉しそうに語りながら、彼女は木炭をカンバスに走らせ始める。木枠に張られた布に、かすかで軽やかな音が走るのが、喋る合間に響いた。

「昔むかし悪戯が大好きな子供が居ただけど、その子供がある時とても真剣にお祈りをして、神様がびつくりして、真っ白な雪を間違えて赤く染めちゃったって言う話でね。」

そのお話から、珍しい出来事を赤い色をした雪が降るって言い方するの。つまり、」

いったん言葉を途切れさせた少女の、木炭を持たない手が、傍らに置いていた紙袋を持って揺らした。中からは、小麦と砂糖を焼いた、甘い芳香が漂ってくる。

「ジオが私にお菓子を持って来てくれるだなんて、珍しい事もあるものね、って言ったのよ。」

そう言うアーシエの顔は屈託の無い笑顔だと言つのに、ジオラトには妙に意地悪げに映つたのだった。

「うるせえよ。団の連中全員に配っても、余るほど貰ったんでな。」

お前は、そういうモンは食い飽きてンだろうけどよ。」

「あら、こついうお菓子って、中々いたたく機会は無いわよ?」

「ほー、みすばらしい菓子は珍しいかい?」

「ジオオ、動かないの。」

「はいよ。」

悪戯めいて口の端を吊り上げたジオラトに、アーシエは半眼を向ける。

「素直にアーシエ様が美人だからプレゼントを貰ぎに参りました、つて言えば、私だって素直に貰つてあげるけど? ……ジオ、頭掻かない。」

「そりゃ無えわ。貰ぐは無えわ。 ……そんぐらい許せよ。」

「じゃあ、贈り物。我慢しないで傭兵つて成り立つの?」

「無い。美人は認めるが。仕事して無え時まで我慢なんざやってられっか。」

「……。今は仕事でしよ、護衛の」

「……そうだった」

一瞬だけ余所を向いて押し黙ったアーシエを見て、内心で勝利の余韻を味わいつつ、仕事である事を今更になって思い出す。

「具合悪くなったら早めに言えよ」

「今は大丈夫。ありがとう」

「何だ、素直じゃねえのアーシエ。赤い雪が降るンじゃねえの？」

木炭が宙を舞い、ジオラートの額にまた一つホクロが増えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2272z/>

---

銀砂雪《あかいゆき》

2011年12月10日00時57分発行